人（ひと）と言葉（ことば）

――鶴見区北中（きたじゅう）・原中（はらじゅう）の地名――

富来　隆

一、はじめに

中学生の時だったか、高校だったか（戦前のこと）次のようなことを教わった覚えがある。

〝人が、他の動物とちがうのは、火を使う動物だからである。〟

〝人が人であるのは、道具を使う（作る）動物だからである。〟北京原人の話だったかもしれない。

さらにそのあと、〝人の人たる所以は、（複雑な）言葉を使うようになったからだ〟と言われた気がする。

そしてやはり、〝人は社会的動物である〟（ポリスとは、社会とも、都市とも、国家とも訳される―）というのが、一番印象にのこっている。

もちろん、これらの一つ一つがバラバラの別のことなのではない。人は、火を利用し、石器を作って道具や武器として使用する。また当然に言葉をしゃべって、互いの意思を伝え教育する。道具が発達すれば、言葉も複雑になってくる。さらに他の動物のように一つの社会集団にぞくして、一つの役目をはたす、というのではなくて、人は、多くの集団（社会）に所属し、さらには自分たちでも集団を作る。そして、それぞれの集団の中で、違った役割りを分担して活動する。複雑多様な生活のなかで、いよいよ文化を発展させてきたのが、人である。

「人」（ひと）とは、こういうものであった。

言葉も、仕事も、人により相手により変わってくる。職業や階級からも変化がみられる。また地域差も生まれる。時代の移り変わり（歴史）によってさらに大きな変化が生じる。

社会関係における言葉（ことば）は、まったく複雑である。だが此所では、そのような言語社会学を論じようとするのではない。現実の社会生活のうえで使っている言葉としての「人」（ひと）、すなわち「人」（ひと）を示す言葉について、少しくその意味を考えていきたいと思う。

直接の動機は、鶴見区にある北中（きたぢゅう）・原中（はるぢゅう）にあった。本格的な歴史研究の余裕もなく下地もないながら、一般論の中で展開してみたい。不備の点は、後考を俟つ。

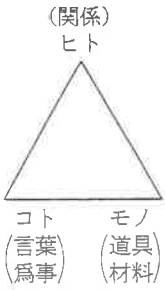
二、人と、事と、物と

私たちが生まれて家族人となったとき、まず覚える言葉は、母であり、乳であろう。また父であり兄弟であり姉妹であろう。オヂ・オバ（ヂヂ・ババ）なども出てくる。それと一しょに、オモチャや食べもの、身近のものを、片言まじりに覚えていく。

人（ひと）は、生まれたときから、自分の周りのヒトやモノのよび名を覚えて成長する。それが大切なコト

（事）、すなわちコトバ（言葉）であり、シゴト（為事）なのである。

かんたんな図式で示すとすれば、次図のようになろう。



人（ひと）にとって、物（もの）と事（こと）とが、切っても切れないのは、これは言葉のうえからでも、物事と言い、また事物など言うことからもうかがえよう。

人と事と物とは、生活（社会生活）をするうえで、常に不即不離である。

漢字は、カナと違って表意文字であり、かつ人・事・物などの名辞（内容）は、一般的に漢字をもって表現される。

表意文字であるだけに、幸いに用いる言葉の「文字」からだけで、ほぼその意味することが諒解でき、お互いに意思が通じやすい利点をもっている。

もちろん、大きく歴史が移り、社会が変れば、同じ言葉（文字）でも、内容が変わってくることは多い。それについては、あとで例をあげて記したい。

現在でも、職業のちがいで、特有の言葉を使うことがある。職人（しょくにん）言葉など、その特例である。しかし問題なのは、日本を代表する政治家や高官たち、日本のエリートとよばれる人たちが、最近とくに、意識的に、言葉の意味をへんな風に使う傾向がつよいことである。それは『辞典』をひいてみても、その真意が分からず、テレビや新聞で解説されてはじめて分かるのである。たとえば、「極力、努力する」とは、じつは「出来ない」という意味で、「前向きに、善処する」というのは「しない（やらない）」という意味なのだ、というのである。最近の日米構造摩擦などもその結果であり、一般庶民からの反撃の日がくることも間違いないだろう。　漢字（文字）は表意文字である。その意味を、正しく使ってもらいたいものである。

そうは言ってもやはり、人間関係は複雑である。一寸表現をかえて考えてみよう。

まず、物事（モノゴト）には、すべて表（オモテ）と

裏（ウラ）とがある。－とすれば、言葉（コトバ）にも、表と裏とがあり得ると考えられてよいことになる。これを、次のような図式で示そう。

一つの軸がある。その片方の側が表なら、反対側は裏ということになる。

それは、表－裏 または $y\frac{\text{オモテ}}{\text{ウラ}}$ ということになる。

表（オモテ）と裏（ウラ）と。したがって裏（ウラ）の裏（ウラ）は、必ず表（オモテ）になる。これは間違いない。

しかし、同時に、もし二つの軸（χとy）があるということになると、どうなるだろう。

右の二つの軸（タテとヨコ）を組み合わせると、左図のようになる。その結果は、全く思いもかけないことになる。

y	（表 オモテ）	（裏 オモテ）
χ	（表 ウラ）	（裏 ウラ）

これを文で記せば、左の四つとなる。

1，表のオモテ
2，表のウラ
3，裏のオモテ
4，裏のウラ

さきほどの、一つの軸のときのように、表と裏とがあっても、裏の裏は必ず表になる、というのとはまったく次元が異なる。複雑きわまるものとなる。

これを、どのように表現したら良いだろう。こういう言葉、したがってこういう人物を、どのように理解したら良いのだろう。漢字（文字）で表現するとしたら、例えば凄腕だというか腹黒だというか、あるいは大物だというか詐欺師だというか、あるいは人非人（にんぴにん）というか、いろいろ言えるだろう。だからそうなると人間（ひと）としての「信用」・「信頼」というものは成立しないことになるだろう。

始めに記したように、人（ひと）は、物（もの）と事（こと）とによって社会関係を構成する。信用される言葉、信用される行動（コト）。言行の一致。これによって信頼される人間関係が生まれ、社会構造が成立するのである。

これは、もう分りきったことである。

人間の生活の第一歩は、じつに言葉と行動というコトである。まず人柄を示すのは言葉である。行為である。

言と行とが表裏一致するからこそ、漢字においても同音の言葉となる。

例えば、

マコト　―　真言・真事

ソラゴト　―　虚言・空事

マガゴト　―　曲言・曲事

　　框言・悪事　などの如くである。

人間関係にとって、社会生活において、最も大切なことは、言葉（コトバ）と為事（シゴト）とのコトが一致すること・であり、そのためには、言葉を、本来の正しい意味で使用すること・である。

漢字が、本来、表意文字であること。だからスナオな言葉づかいによってこそ、互いに信じあえる集団生活が行われることになる。

人（ひと）を示す言葉は限りなく多いが、それらの用語例を、その意味を正しく理解し、実例をあげていく中で、私たち自身が正しい社会理解をすすめるよすがとなるようにしたい。

三、人と職業

私たちが、他の人をよぶとき、ふつう、「富来さん」とか「富さん」などと名前（苗字）を言う。子どもだったら「和男君」だとか、あるいは、「和坊」などと言ったりする。

しかし、もう一つ、職業による呼び方がある。「市長さん」とか、「お師匠さん」などと言ったり、また「郵便やさん」と呼びとめたりすることがある。私などは、他の人が「先生」と言ってるのが耳に入ると、つい自分のことかと振り向いたりする。数十年の永い教師生活がしみついてしまっているせいだろう。

他の人をよぶのに、名前と同じように、その人の職業で呼ぶというところが面白い。

言葉というものは便利なものである。

「名は体をあらわす」などと諺にもいうように、職業がそのまま、その人の呼び名（の言葉）として通用するのである。これが人間社会の現実である。

あるいは、ここにも、「漢字」が表意文字であること

の特色があらわれているのではなかろうか。

そういう意味でも、しばらく「職業」のことについて考えていきたい。「職」と「業」とが一つになって「職業」といわれるのであり、まずは別々に『辞典』を引くことから始めねばなるまい。

とはいうものの、私の専門である歴史社会学からいうと、何といってもまず忘れられない論文がある。もう、お分りであると思う。ドイツの碩学マックス・ウエーバーが第一次大戦あとに講演したものである。その一つが『職業としての政治』（一九一九・一月）であり、いま一つが、『職業としての学問』（同）である。

前者のなかで、彼は「職業」のことについてふれ、そして政治家としての「責任倫理」について説いている。

有意文字である「漢字」のばあいと違って、いろいろと説明しているわけであるが、ここで比較できる程度に、かんたんに紹介したい。

「政治を職業とするのに、二つの道がある」「政治のために（Für）生きるか、それとも政治によって（von）生きるか、そのどちらかである」。「この対立は決して相容れないものではない。……両方の生き方をするのが普通である。」（「岩波文庫」二一～二二頁）

右に明らかにされたように（政治の）職業には二つの道がある。「のために」生きるのと、「によって」生きるのとであること、これは両立するものであること、の説明がなされているのである。

漢字のほうでは「職」は、「ツカサ・ツトメ・ヤクメ・任務・責任・家業・ワザ」などとあり、「業」のほうは、「ワザ・仕エテ苦労スル仕事・技術・ナリハヒ・ヨスギ・経営」などとある（『大字典』）。

表意文字である漢字だから、この語をつかった言葉を考えれば、「職」のほうでは、天職・聖職・公職・汚職・殉職などがあり、これはウエーバーのいう「のために」生きること（使命感）の義である。これに対して「業」のほうは、事業・企業・営業とか、生業などと生活の仕事のほうである。ウエーバーのいう「によって」生きること（収入の手段）である。

「職業」（職と業）とは、こういう二つの内容をもつものだということが、漢字（文字）のうえからも、すで

に明らかにされるのである。

ということで、いよいよ本論に入ろう。

さきにも述べたように、「人」を呼ぶのに「職業」（仕事）で呼ぶことがある。そして、例えば江戸時代・封建社会での例（もちろん現在にもつづいているが－）によってみると、

公家（公卿）	武士（武家）、法者、法師
商人（町人）、浪人（浪士）、職人	農民（農夫）、漁民（漁夫、漁師）
刀師（刀工、刀匠）、鋳物師、木地師	鵜匠、鷹匠、番匠（大工のこと）
師匠、宗匠	（身体の一部で代表するもの）番頭、手代、人足、船頭、手子、飛脚、

「師匠」などの語のように「職業」という語の構成と似ているものもある。また別に、身体の一部をもって、職業のちがい（働き）が示されているものも注目しなければならないが、これはまた後に記したい。

以上のように、職業のちがいによって、（その下につく）人を示す語がちがって用いられている。人（ひと）の呼び方が異なっていること。－このことを考えてみる必要がある。

漢字が表意文字であることからすれば、「人民」とは言うけれど、その「人」と「民」との相違をキチンと明らかにしておかなければ、前にはすすめない。

「公人」と「公民」との違いを、といわれても、分りにくい。だが学校の科目で、「公民科」とはするが、「公人科」にしないのは、何故か。

しかし（東京の）「大分県人会」というのと、（私たち）「大分県民は……」という言葉を比べるときは分りやすい。明らかにちがう。「本人」とか「友人」・「美人」などというが、このとき「民」はつかない。それにたいし「市民」とか「貧民」とか、最近はまた「難民」などの語もよく目にする。

「人」と「民」と。両者の違うことは明らかであるが、やはりキチンとした異同（相違）は、『辞典』によらなければならない。

『大字典』によると

◎人　ジン（漢）　ニン（呉）　〔字源〕人を側面より、見たる貌、

ヒト　●ヒトは、貴賤男女、凡そ人たるものを云ふ、

人間

オトナ

◎民　ビン（漢）　ミン（呉）　〔字源〕母と一の合字、

タミ　●タミは、公羊伝に士農工商を四民といふ、

ヒト　士庶人はみな民といふ、

仕へざる者をも民といふ、

（治められる者）

◎者　シャ（漢）（呉）　〔字源〕

モノ　●此は此、彼は彼と、事を別つ語なり、

人・事・物　○物とは別、

物ヲ分ツ語

右によっては、なお分りにくい点を『漢和大字典』で補うと、つぎのようになる。

◎人　①（ひと）人間、②（ひと）他人③（ひとごとに）人々の略④人数を数える言葉、

◎民（たみ）治められる人、権力をもたない大衆、またひろく人間、

〔解字〕ひとみのない目を、針で刺すさまを描いた象形文字で、目を針で突いて目を見えなくした奴隷をあらわす。

のち、物の分らない多くの人々、また、支配下におかれる人々の意となる。

人（ひと）のほうは、もと、自分と同等の仲間のこと、

◎者　①（もの・こと）…するその人…であるそのもの

●者は、その事を専らにする一局の語（智者・仁者）

以上によって、「人」は自由人のこと、「民」は治められる人（支配権力の下にある人）のことだ、との相違がはっきりしたわけである。＝日本古代の「公地公民の制」＝。「公民」に対し「公人」と云えば、これは公

（オオヤケ、政府）の機関における資格の人、すなわち支配者の意となり、支配される「公民」とは反対の意味になることも、ここで明らかとなる。

これらに対して「者」は、さきのように「そのことを専らにする人」であり、専門家・その道で尊敬される人、の意味を持ち政治・権力とは関係なしの立場である。

さて、しばらくなお「人」（ひと）を示す言葉を、右の外にいろいろ求めてみる。例をあげてみよう。

人・民・者・士・師・匠

主・員・夫・婦・子・弟

生・方・衆・達・友・輩

徒・家・屋・居・坊・造

男・女・郎・奴・物・分

丁・ほか。

まだまだ考えて求めれば、なお多くあろう。さらに又これらの実例を一々あげていくのは煩雑にすぎるので省略するとし、「人」（ひと）の語だけ拾ってみる。

じん	吾人、佳人、国人、奇人、名人、成人、俳人、主人、美人、外人、変人、達人、友人、歌人、婦人、令人、異人、凡人、聖人、同人、門人、家人、麗人、衆人、囚人、賢人、通人、ほか
にん	御家人、当人、善人、芸人、仙人、証人、（人夫）浪人、本人、悪人、番人、上人、代理人、（人足）商人、他人、下手人、病人、聖人、甲乙人、職人、下宿人、流人、怪我人、死人、犯人、ほか
と	寄人（御歌所） 蔵人　殿上に近司し文書を司どる 良人、客人、盗人、商人、狩人、仲人、業人、祝人、間人（亡土）、若人、玄人、方人、（一味同心）、山人
ど	
ひと	現人神（あらひとがみ）、殿上人、雲上人、眞人（古代の姓）恋人（こいびと）、待ち人、旅人、世捨て人、付き人、ほか
り	舎人（とねり）、一人（ひとり）、二人（ふたり）

そのほかに、語の相違を比較・確実化するために、少しく例示しておきたい。

私たち自身の職業がら、教師といい、教育者といい、また教員・教官ともいい、普通に先生ともいわれる。

医者も、医師ともいい、先生ともよばれる。

政治家も、議員といわれ、代議士ともよばれ、さらには先生ともよばれる。いろいろな呼び方がなされる。

さきにもあげたように、刀匠・刀師・刀工などとよばれ、漁民・漁夫また漁師とよばれる。多くの呼び方が

なされるのが普通のようでさえある。時と場合、相手との関係、さらに歴史的（時代の）変化、等々ー。

「刀師」といい「刀匠」というが、「師匠」という言葉もある。さきの「職・業」のこと、また「人・民」のことのように「師・匠」のことも考えてみるべきであろう。

それらの中で、面白いと感ぜられるのは、「家」（か）と「屋」（や）との異同であろう。「家」を「か」とも「や」ともよむから、尚更その辺のところが面白くなる。例示してみよう。

家（か）のほうは、王家・公家などは特別として、名家・大家（たいか）・芸術家（画家・書家・音楽家など）作家などの専門家があり、古くは諸子百家などもある。また政治家・資本家などもある。いずれにしても「家」は、家の中での活動という感じになる。屋（や）のほうは、店の活動が連想され、八百屋・魚屋・薬屋・本屋さん等がすぐ浮かぶ。テレビでは水茶屋・屋台などがよく出る。屋号としての豊前屋とか備後屋なども同様である。

両者のちがいはどうか、ちょっと視点を変えてみるとよく分ると思う。豊前下毛の八面山（屋山という）、また国東にも同名の屋山（長安寺あり）、例の有名な屋島・壇ノ浦の戦の屋島など。これらをみると、いずれもみな横長の梯形 の山容である。これと似た形の「店」を思えば よいと思う。

これに対し、「家」のほうは玄関から家の中に入る。したがって家島・伊江島などは、 屋山とは全く形が異なる。

家（か）の仕事と、屋の仕事（店）との相違が目に浮かんでくる。

ただ、これに加えて「皮肉や」・「やかましや」・「分らずや」・「恥ずかしがりや・照れや」などの「や」がある。この「や」は屋なのか、家なのか、分りかねているのが本音のところである。

紙数がふえるのみである。先に記したような「人」を示す多くの語の例示は省略して、つぎに急ごう。

四、人（ひと）と身体

「人」（ひと）の活動は、言葉だけでなく、身体の働きをもって示されることが多い。ことに手足のはたらきは著しい。そういう意味で、身体の一部をもって「人」（ひと）を示すに至るのは、あるいは当然のことと云えるかもしれない。

身体の各部のことに、私が関心を持つに至ったのは、江戸幕藩体制のなかに、多くの身体部分の名が見えるからであったが、直接的に強い関心となったのは、中田薫博士の『法制史論集』第三巻（一六〇〇頁余）の付録第一「法制史における手のはたらき」を読んでからである。

それは日本にとどまらず、ローマ法・ゲルマン法・英米法をふくむ、古今にわたる壮大なものであった。

1，手は全人格を代表、2，手は支配（権）を代表、3，手は保護を代表、4，信の義を代表、などである。しばらくは圧倒されるだけであったが、右を下敷きにし、江戸幕藩制にみる身体の部分も考え、とにかくに「人」の身体に関する（頭の先から足の先までの）もの全部を、そういう言葉を（諺などもふくめて）、何でも片っ端から書きあつめてみようと思い立った。昭和十八年のことだから、ずい分と昔の話である。それからずっと、思いついたら書きつけてきた。

「部分が全体を代表する」という考え方からして、この仕事、意外に楽しく、永年つづけられたものである。

まず、江戸幕府職制表をみよう。

大老・老中・若年寄の下に、家老・大目付・大番頭・頭取などがあり、さらに番頭・組頭・同心・目付（徒目付・小人目付）などが見える。

諸藩の職制から拾うと、仙台藩で番頭や目付のほかに横目・小人・足軽・元締・頭取などあり、米沢藩には奉行の下に中老、さらに年寄とある。郷村頭取もあり、城代の下に用人、さらに小者・下男なども見える。会津藩には同心・小頭あり・岡山藩では船手役所－その下に名主・年寄とある。長州藩にくると、会津の小頭に対するような大頭・物頭があり、目付の下に横目・目明がある。あとはもう省略しよう。

当時の職制でもこうである。「人」（ひと）をあらわす言葉は（歴史時代をふくめれば）現代に至るほどます

ます増えるのである。

頭首・頭目・巨頭・首脳・首相・首領、また石頭とかツムジ曲りなども考えられよう。

国守の代官を「目代」と云い、補佐役のことを「耳目」という。『魏志倭人伝』には「生口」（ドレイのこと）の文字も見える。医師また囲棋の名人のことを「国手」と云い、細川藩の大庄屋のことを「手永」といい、大分県にも鶴崎手永や国東手永などの名が残っている。「太っ腹」とか「お茶目」・「ヘソ曲り」・「腰ぬけ」なども面白い、手や足は、もう無数といってよいほどである。手足の活動が、私たちの民俗・社会生活の基本だからである。

（付）選民思想＝他への悪口＝

古来、世界的に、どの民族も選民思想をもつ。だから特別のことはない、とも云える。

中国では、東夷・西戎・南蛮・北狄の語がある。

日本でも古代の大分県に関し、神武天皇や景行天皇の御代（書紀・風土記）、土蜘蛛（くも）とか熊襲（くま）のほか、サル・ヘビ・犬神族の名が見える。

現在でも、相手を、馬鹿（ばか）・豚馬（とんま）、グズ・阿呆・畜生めなどと言ったりする。

仏語からは餓鬼（がき）大将などと云うが、戦時中には「鬼畜米英」という語が使われた。

子どもたちには、餓鬼のほかに、泣き虫・弱虫・悪たれ・頑たれ・クソッタレ・阿呆（あほたれ）など、数多くある。バカ者・オタンコナス・オタンチン・など、ひどい言葉も、私たちが子どものころには、まだよく聞かされた。

五、人の外来語

北中（きたぢゅう）・原中（はるぢゅう）について考えをすすめようとして、ずい分と遠廻りをした感じである。だが、〝急がば回れ〟という諺もあるほどで、私としては、これでもかなり急いだつもりである。諒とされたい。

さて、つぎに、外来語の日本化したものを、二三記し

てみる。今は亡き金関丈夫先生から、お教え頂いたものである。

◎　その一は、台湾の高山族などにみる「トゥー」「ツォー」（人の意）である。台湾の東南の「紅頭嶼」の「頭」もそれであるという。日本語のカナで書くと感じが変ると思うが。古代・九州の「隼人」（はやと）の「ト」も、それではなかろうか。日本語の人（ト・ド）というのがあるのを考え合わせると、よく分る。

◎　その二は、ボルネオ島などでの「ソゥ」「ゾゥ」である。第二次大戦中に、現地に出兵していた人たちも「そうだ」と言っていた。古代九州の「熊襲」の「ソ」もそれであろう。豊後風土記には「球磨贈於」（くまそお）とある。地名としては鹿児島県の「曽於郡」（そお）が、たしかにそれである。阿蘇のソ、麻生・阿蔵のソウ・ゾウもそうであるかも知れない。（麻生は文字どおり麻の生えている地のばあいもあるだろうが、なかにはソゥのばあいもあるように思われる。）

日本古代史で、女王卑弥呼にも擬される「倭迹迹日百襲媛」の名について、その意味によく分らないところがある。私はこれを、「ヤマト・トトビ・モモソ・ヒメ」と読み、ヤマトと、ヒメとの間に、トトビ・モモソが入れられていると考えた。そして「トトビ」とは「十のトビ」で「モモソ」とは「百のソ」であるとした。トビとは古代の竜蛇神（宗像神からひろがったもの）で、古代の人名もトビ、トベなど多く見られるから、おそらく間違いあるまい。そして「ソ」のほうは、さきの「人」の意味の語であろう。

「トトビ・モモソ」とは「十神・百人」という超能力の表現であろう。この媛の墓が、「昼は人が作り、夜は神が造った」と記されているのも、これが「十神・百人」の超能力をもつ媛という名にふさわしいと思っている（拙著『卑弥呼』の「補遺」を参照されたい。学生社刊）

現代では、若造（わかぞう）とか御新造さん（ごしんぞ）、また有象無象（うぞうむぞう）などのゾ・ゾウがそれであり、人名としても「造」「蔵」「三」などの用字にみられる。

◎　その三として、沖縄語のチュウがあげられる。日本

人を「ピチュウ」（日中と宛て字する）という。中世の古文書によく宛て書きに「〇〇衆中」と見える。大野川中流の犬飼・吐合（合流点）の台地先端に、八幡大神と住吉大神とを祀り、その石灯籠に「大分部船頭中」と刻まれているのが印象的であった。昔の寺子屋の貼り出し（教訓）の宛て書きにも「児童中」とある。中（チュウ）とは人々（一同）のことを指している。

現在でも集団として示すばあいに、「連中」と云い、舞踊などで「〇〇社中」と云い、宛名書きに「〇〇御中」といって「人々（多数）」を示している。

さきの江戸幕藩の職制のなかで、幕府に、大老、老中があり、米沢藩には中老というのがあった。

大老と中老という関係なら分るが、大老と老中とは（大と中のあり場所が）反対である。これを考えてみるために、まず「老」の意味を知らねばならない。

『大字典』によると、老とは「オユ」のつぎに「尊称・家老・公卿ノ長・諸侯ノ長・家臣ノ長」と見える。

そこで『日本史辞典』をひいてみた。大老とは「江戸幕府の最高の職。老中の上に必要に応じておかれた臨時の職。定員一名。徳川氏が、三河の大名であったときは、家老と云い、年寄（のちの老中）の上にいて、政務を総理した。」。

右に対して老中とは、「江戸幕府の職名。将軍に直属し、政務を統括した幕府の最高の職。はじめ、宿老・執政・閣老などとも言った。定員四名〜五名（複数）で、月番。一名づつ交替して責任となった。」

これでほぼ分かった。宿老・閣老などの語から（大老ができても）中老にならずに、老中になったのは、「中」が「人々」（複数）を意味したことによる。

また、郎党・郎等（トウ）・郎従（チュウ）の語がある。「家中」「ご家中」の語は、テレビの時代劇にもよく使われる。「家中」とは何か。『日本史辞典』では「江戸時代の一藩の武士の総称」とある。藩士たる身分を示した、ものである。「家中」とは家臣・家士（の人々）ということである。

さて、つぎに今一つ「女中」という語をみたい。

『大字典』や『古語辞典』『国語辞典』などから総合してみると、歴史的に「女中」の地位はずい分と下って

きていることが分かる。

(1)宮中に仕える女。将軍・大名家などに奉公する女。仕官奉公する女（奥女中）。

(2)婦人の敬称（武家の奥方や娘子）。

(3)他家で主婦を助けて家事の手伝いをする女・下女。

ところで、つい最近、「女中」は差別用語だとして、「お手伝いさん」になった。歴史を感じさせる。

「中（ちゅう）」の語が「人々」をさすのは明らかだが、そのことから「集団」→「地名化」として、「村」を言うようになったことも理解しなければならない。

最近のＮＨＫテレビで『翔ぶがごとく』のなかで、薩摩の「郷中」という見出しがあった。朝日新聞（九・二十一）の「九州人」にも郷中のことが記されていた。

「郷中」が大分県では「郷村」になるという感じである。したがって、別府・鶴見区の「北中・原中」も、右からして「北村・原村」の意味となろう。　有名な木曽川の「輪中」（部落）の「中」もおそらく、これと同じではなかろうか？。他にもさがせばまだまだあることだろう。

ただし、九州での原（ぱる）は、古代朝鮮語の伐Pol・弗Pul・夫里Pulの音写で、「村（むら）」という意味だということも忘れられてはならない。

やっと本論にたどりついた。チュウの意味だけならば、ここで完了としたいところである。

しかし問題はなお残っている。なぜに、此処にだけ、チュウ（中）の言葉が使われているのか、である。沖縄とまでなくとも、少くとも薩摩地方との文化交流（往来・移住）などを考える必要はないか、ということである。温泉とともに、豊かな湧水が「村」を成立させただけでなく、明礬（みょうばん）や硫黄（いおう）の精製が大いに関係あるものと考えられる。「タタラ」の地名もある。

幸いにも、『別府市誌』（四三三頁）、さらに『日出町誌』（八〇九頁）には、右についての説明がなされている。今は、すべて、それにゆずりたい。

六、おわりに

北中・原中のチュウ（ジュウ）が、沖縄語の「人」（人々・一同）から、薩摩の「郷中」にみられるように集落（集団）の義に発展していることで、一応の解決はみられたと思う。

また、九州各地にあり、鶴見区にも多くみられる「○○原（バル・パル）」の地名「原（はる）」は、古代朝鮮語のpul（村）の義であることも同じく認められよう。

これで一応の結論は出たつもりであるが、じつは、チュウ（中）について、もう少し考え合わせねばならないことがあるので、補っておきたい。

その一は、親族の呼称（同族集団）について、「中」の文字のつく「門中制」があることである。

沖縄にみられる門中の制度（同族集団）について、と同時に朝鮮半島にも同族集団を「門中」・「宗中」とよぶ制度のあることが、村武精一氏や中根千枝女史らの詳論で明らかにされている（「社会人類学」）。

中国大陸での「宗族」また日本での「一門」（一族・一統）と比べながら、沖縄と朝鮮半島とに、「門中」制度とよばれる同義語のあること、これをどう解すべきかに迷ったままである。九州はその中間地だけに尚更である。チュウを南方系とばかり考えていたからである。

つぎに、いま一つ、問題がのこった。頭（トウ）のことである。「頭」は（漢音）トウ、（呉音）ヅ、と読み、カシラのこと―台湾で「人」（ひと）を表わした。

ところがさらに（唐音）で、ジュウ（ヂュウ）となることを知った（『漢和大辞典』）。たとえば、饅頭（まんじゅう）がある。また塔頭（たっちゅう）がある。塔頭とは、「大きな寺の境内に、祖師・高僧の弟子たちが住む小坊のこと。チュウは唐宋音であり、のち塔中と記すようになった」とある。―阿蘇の坊中など―。

ここで問題が（私の内に）おこった。チュウを沖縄語系（中は宛て字）とのみ思っていたところ、「頭」が（唐音で）ヂュウとなり、宛て字も塔頭→塔中と「中」に変わったとなると、この問題も、どう考えるべきか。

右の二つ、同じく「中」（チュウ）であり、「人」（ひと、集団）に関することでもある。これらも再考する要があろう。御高教を仰ぎたい。